

創立150周年、200周年に向けて

横井和彦

奨励者紹介[よこい・かずひこ]

同志社大学キリスト教文化センター所長

同志社大学経済学部教授

[研究テーマ] 中国の「国進民退」と都市「単位」の変容

イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」

(ヨハネによる福音書 8章12節)

「扉を開きて」

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。皆さんは、同志社の扉を開いて大学生生活が始まったわけですが、いかがですか。また、チャペル・アワーの扉を開いて、ここクラーク・チャペルに集ってください、ありがとうございます。

私も新たな扉が開かれ、この4月から、石川立前所長からキリスト教文化センター所長職を渡されました。これまでも一信徒として、あるいは、キリスト教文化センター委員会委員・同幹事として当センターとかかわってはきましたが、今後は、センターの教員、職員をはじめ、当センター委員会委員の先生方、チャプレン、オルガニスト、関係科目の講師の皆さま、諸活動を担ってくださっている方々とよりいっそう力を合わせて、当センターの使命を担っていく所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

創立150周年に向けて

さて、昨年2015年は、同志社創立140周年でした。この節目の年に、同志社京田辺会堂の活用が本格化いたしました。この同志社京田辺会堂献堂によって、京田辺校地においても、新たに火曜チャペル・アワーが京田辺会堂の言(ことば)館礼拝堂において始まりました。これまで集会室でまもってきた水曜チャペル・アワーは、言館に場所を移すとともに、時間も10時45分開始から15時開始に改められました。金曜ランチタイム・チャペル・アワーも言館で引き続きまもっています。また、同志社礼拝堂同様、メデーション・アワー(オルガン演奏)も始めました。今出川校地同様、初めてクリスマス・イブ礼拝もまもりました。

京田辺会堂の光(ひかり)館ラウンジには、新島襄関連資料展示スペースが設けられ、新島や同志社に関連した展示を行うことになっています。現在は、「新島襄と自然科学」をテーマとした展示が行われています。

このような新たな歩みが始まるとともに、2015年度には、同志社の原点を見つめ直し10年後へ向けてさらなる飛躍を目指した「同志社大学ビジョン2025」が発表されました。

そこでは、キリスト教主義について「本学の原点であり、3つの基本理念（すなわち、キリスト教主義・自由主義・国際主義）のなかでも中核をなすもの」とされています。そしてその今日的意義を読み解き、本学の社会的使命との関係で理念の具体化をはかるために、(1) 教育における「徳育の多様な実践」、(2) 研究における「人づくりの一場面としての研究」と「あらゆる研究の自由の保障」、さらに「挑戦的研究への支援」、(3) 卒業生との連携における「同志社コミュニティのメンバーとの関係強化プランの策定」、「『同志社パートナーシップ』の確立」、(4) 社会貢献における「知と徳の社会への還元」と「多角的な地域貢献プランの策定」が掲げられています。

実は、これに先駆けて2014年度から、当時の学長の諮問による「同志社大学宗教教育に関するワーキンググループ」が立ち上げられており、さらにキリスト教文化センター委員会の下にも「キリスト教主義に関する正課外教育プログラム検討部会」が立ち上げられました。

前者の答申では、本学のキリスト教主義をより深く理解してもらうための指針として、(1) 同志社のキリスト教である会衆派、(2) 人物を通してのキリスト教主義教育、(3) 同志社科目(群)と卒業要件、(4) キリスト教主義教育における教職員の役割、(5) 良心学教育センターとキリスト教主義教育が掲げられ、本学としての宗教教育のあり方、発展に向けた諸方策とされています。後者の検討結果、「同志社大学のキリスト教主義—その再確認と推進—」では、(1) 学生にキリスト教主義への理解が浸透していない、(2) 教職員一人ひとりの建学の精神やキリスト教に対する理解が不足している、(3) 学内組織や学外機関との連携が不十分である、との三つの課題をあげ、具体的なアクションとして、(1) キリスト教主義の理解促進のための資料作成、(2) 教職員のキリスト教主義に対する理解の促進、(3) 学内組織、学外機関との連携強化を掲げています。

キリスト教文化センターは、創立150周年にむけて、同志社の「キリスト教主義」の理念についてその重要性の確認を行いながら、これらの大学の課題を引き受けていきたいと考えています。

創立200周年に向けて

ところで、イエスは、「わたしは世の光である」と言います。それは、強烈な自意識と言えるでしょう。他の箇所でもイエスは、「ほかでもないわたしこそがいのちのパンなのである」あるいは「世の光なのである」などと自己紹介しています。

しかし一般的には、その人が何者なのかは、その人自身が言っても証言とはならないでしょう。他の人が証言しなくては正式なもの、あるいは正しいものとは認められないというのが一般論ではないでしょうか。「自分はこのような人間です」と言うだけでは通用しません。最近はいよいよ、自分を証明するものを提示することが求められるようになってきました。研究室に入るにも社員証が必要です。私は社員証を忘れないように、首から下げて歩くようになりました。ちょっと外に出るのに社員証を持っていくのを忘れて、締め出されたことが何度もあったからです。他者からの証明というものは客観性をもっています。社員証の場合は、「この顔写真の人は横井和彦と言い、同志社大学に所属している」と大学が証明しているのです。ただ言い張っているだけの人よりも、大学がお墨付きを与えると、客観性が増します。

しかし実は、今日の聖書の箇所は、この客観性というものを疑ってかかるようにとっています。イエスの主観的かつ無茶な言い方を肯定的に紹介しているからです。それによって私たちが陥りがちな間違いを教えています。

このようなことを言いますと、お前は本当に大学教員かと言われてしまいそうですが、私たちには、一見客観的に思える意見・専門家の権威ある意見には耳を傾け、一見主観的に思える意見・素人の意見には耳を閉ざすということがよくあると思います。しかし、本当にその人の言葉が真実であるかどうかは、客観・主観とは関係ないのです。本当にその人が光をもっているかは、主観的に語っているか、それとも客観的に語っているかは関係ありません。その人の肩書の有無も本当のところは何も関係ありません。客観的に専門家が語っても欺瞞・欺きはありえます。主観的に素人が語っても真理を言い当てることもありえます。だからこそ、とりわけキリスト教主義の本学では、学生の皆さんとの議論や語らいが、私たち教員にとって大変重要だと言えるのです。新島の言う「人一人ハ大切ナリ」もそういうことだと思うのです。

それでは、「暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」、すなわち、同志社の創立150周年への道が「暗闇」ではなく、さらに200周年という、いわば同志社にとっての永遠の命の道が開かれるというのはどういうことなのでしょう。

「光」という言葉を聞いて、何が思い浮かぶでしょうか。ある人にとっては日光かもしれません。またある人にとっては、小さく灯ろうそくの光かもしれません。またある人にとっては、日本人研究者にノーベル賞をもたらした、青色発光ダイオードの光かもしれません。けれども、この光という言葉に、「希望」を見いだす人が多いのではないのでしょうか。すなわち「希望の光」です。また、「光」には、隠れているものを明らかにするという働きがあります。私たちには、光を待ち望むと同時に、光を避けようとする気持ちが生じることもあると思います。大変残念なことですが、先日、私たちの仲間から、自動車事故を起こしながら発覚を恐れてその場から逃げ去ってしまった者が出てしまいました。こうしたことの背景には、光のこの性質が関係していると考えられるでしょう。つまり、光を避け隠れながら生きる状態が、「闇の中を歩む」ということと言えるでしょう。闇の中に隠れているとき、私たちはだんだん孤立していき、神様との交わりはおろか、人との関係も築けなくなってしまうのではないのでしょうか。研究も人づくりの一場面であり、直接的・間接的に学生の成長を促す機会であると位置づけることが本学らしいと「同志社大学ビジョン2025」でも述べられているように、「真理の探究」のために自らを明らかにすることこそが「闇の中を歩か」ないということであり、また同志社人としての人の関係を築いていくということになるのではないのでしょうか。

さらに、2016年度からは、ボランティア支援室が開設されました。2015年度においても、たとえば前述の光館ラウンジの展示の制作に際して同志社社史資料センターの協力を得たり、スポーツ健康科学部新入学生向けオリエンテーションや文化情報学部・文化情報学会設立10周年記念式典の開催に際して言館を提供するなどしてまいりました。このような学内の他部署をはじめとして、今後は、本学同様、新島が設立した同志社教会などを含む、幅広い組織・機関との協力・連携も進めていきたいと考えています。

創立150周年、200周年につながる道

他人に危害を及ぼさない範囲で、私たちには強烈な自意識が必要だと思います。それは自分が携わっていることに対する誇りです。それは、私たちは同志社人だ、との誇りであると言えるでしょう。その結果、私たちは真理を語るができるようになるのです。

私たちは日々の生活の中で、さまざまな過ちを犯します。しかしそれを隠すのではなく、勇気をもって自らの暗闇を光の前に差し出すこと、それが同志社の創立150周年、200周年へと続く道につながるのだと言えるのではないのでしょうか。

2016年4月13日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録